

(仮題) 臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

新春号

63. 2. 1

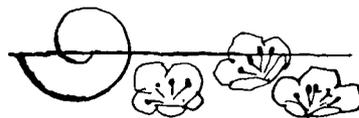


新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

No. 3

昭和63年新春号目次

ごあいさつ 新年に寄せて.....	支部長 佐伯 益 一	1
ありがとうございました.....		2
母校, 本年度卒業生は 274 名.....		3
雑 感 (思い出)	中 村 倉 吉	4
戦争の思い出.....	水 尾 広 吉	5
奮い立つべし村松高等学校.....	伊 藤 淳 一	8
なつかしい半世紀前の「力作、ふたたび」.....		10
秘蔵写真をお貸し下さい.....		12
戊辰の役と堀家の改姓.....	佐 藤 久	13
予 告.....		15



〔表紙写真〕 浅草, 観音さま境内にある水家の天井に描かれている龍の絵である。仲々迫力があるが作者は分らない。参詣する人でもこれに気づく人は案外に少い。一度ご覧になって由来を調べてみるのも面白かろうと思う。 (撮影 佐伯)

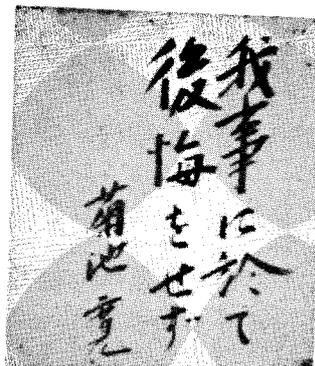
ごあいさつ 新年に寄せて



東京支部長 佐伯 益一

新しい年を迎えてから早や1ヶ月余経ちましたが、同窓の皆様にはお変わりなくお過しの事とお慶び申し上げます。

旧年中は東京支部の諸計画の実施について何かと御協力、御支援を賜り誠に有難うございました。御厚礼申し上げます。おかげをもちまして、長年の懸案であった名簿及び会員登録の作業も順調に進み、只今の処230名を超える御賛同を頂き、且又年会費徴収の件に関しても、1月末日現在131名の方々から続々と送金や寄付金が寄せられ、すでに40万円近くの資金が集って来ております。これも皆様の深い御理解によるものと重ねて御礼を申し上げます。今までは大会や会合などで赤字が出ると、そのたびに主だった者4～5人がポケットマネーを出し合い補填をしていましたが、これは同窓会本来の姿とは言えず、又これでは次第に役員のみならず手も少なくなってゆく事と思います。幸いに今後はこのような心配も無くなると思いますし、私以後の役員の方に新しい道を開く事が出来たと私なりに喜んでおります。同窓会東京支部のあり方、進め方につきましては、今まで活字を通じ或いは御挨拶の中で何回となく申し述べて参りましたが、只集って飲み、歌を歌って楽しむだけでなく、その歓談の中から何か役に立つものを得、新しい情報社会の中であって、事業に生活に資するものをお互につかもうとの意図を明確に示さなければならぬと考えます。



最近、各地で同窓会、クラス会或いは戦友会等の集りが開かれ隠れたブームとなっておりますが、これらも只懐古趣味ばかりでなく、何かしら人生に役立つ意義があるとの事と推察します。

私は現在すぐれた幹事役員の方々に恵まれており、明るい雰囲気の中で支部長の職務を遂行する事が出来、誠に幸であります。先輩後輩の別なく真剣に諸事に取り組む姿には常に感謝している処であります。本年も又幹事役員の方々及び同窓各位の御協力を得て、同窓会をより楽しく有意義な集りにしたいと努力を続けてゆく所存です。

今年は昇龍の年、今こそ臥龍起つべしと臥龍健児健女の御健斗を願って止みません。その意味でも表紙には龍の写真掲げる事に致しました。お願い事ばかりで恐縮でしたが何卒よろしくお願いいたします。

最後になりましたが今年は例年になく多くの賀状を頂きました。有難うございました。然し喪中の御通知もきわめて多くありました。肉身の方を失われた悲しみも又一入であろうと存じますが、悲しみに負けず頑張ってほしいと思います。

40数年前、知人から菊池寛先生の色紙を頂きました、“我が事に於て後悔をせず”。この言葉は私の大変気になっている言葉です。私の半生、悔だらけの人生でしたがくよくよしても始まらぬ。これからでも悔いの無い人生を送ってゆこうと座右の銘にしております。

暖冬とは申せこれから寒くなる時期です。皆様には呉々も御自愛の上、人生御多幸である事を祈念して御挨拶に代えます。(昭和63年1月)

(旧中27回)

「ありがとうございました」

62年度分会費納入状況

63年2月末まで昭和62年度の会費を納入して頂くようお願いいたしました処、1月末現在、131名の方から会費が送金されております。納入された方の御氏名は下記の通りです、有難く御礼申し上げます。この発表は中間ですが、或いは氏名が脱落している方が居られるかも知れません。御連絡頂ければ幸いです。

尚62年度会費は中途から決定したので変則的になりましたが、引き続き63年度分会費も追いかけて納入して頂くような形になります。振替用紙が届きますが、何分よろしくお願い致します。

62年度会費納入者氏名(年額 3,000円)

〔旧中〕 44名

長野武夫、渡辺文男、相田栄七、水尾広吉、村田泰次郎、横山信夫、片桐賢太郎、川崎進一、伊藤十思夫、大橋文夫、佐久間精一、二平晶、関谷捨藏、亀崎謙、田代正夫、中村倉吉、吉田松二郎、茂野宏一、堀哲二、松田長四郎、芳原英男、佐久間二郎、宮健三、北沢卓夫、熊倉万夫、佐伯益一、西山荘平、吉田公男、斉藤朝之、寺田徳隣、飯田清、松尾昭夫、松尾貢、佐藤豊夫、成海正弘、相田忠亮、伊藤勇五、斉藤和男、国順一、中村雅明、芳賀健一、丸山裕平、長尾昭次、金子敬三郎

〔旧高女〕 16名

藤崎トヨ、新保美和、川西恒子、大橋トヨ、大橋玉枝、熊倉芳枝、渡辺ミツ、内田道子、堀和子、田村ミツエ、岡本和子、佐藤玲子、鈴木節子、小林早月、神田マサ、石井洋子、

〔高校〕 68名

青木猛、杵淵政海、川合敏男、坪谷次郎、長沢友次郎、亀山智明、剣持常泰、関孝世、高橋研治、渡辺八郎、小

池生夫、大島エミ、佐藤八重、今井道夫、木村時也、杉崎卓、清野一夫、二宮文三、横溝田鶴、熊倉芳夫、酒井俊昭、高地一郎、樽井了、浅井昭男、佐久間英輔、沢出尠允、小林啓治、坂爪圭子、馬場淑子、笠原大四郎、八木又一郎、深見洋子、佐藤良平、関塚豪、塚田勝、堀直昭、関和世、片柳ムツ、久我マキ、石黒四郎、沢井昭、大橋貞夫、鶴巻浩、米山正、宮沢正由、熊倉悦子、真水道子、大野靖子、伊藤郁夫、山田のり、山田孝美、斉木明子、中山斉子、由良美智子、佐々木秀和、富田幸男、荒井るり子、鈴木則子、笠井勉、石井典雄、梅田久次、渡辺方夫、佐藤知伸、寺山和夫、寺山征子、小野里伸三、佐藤句子、鈴木多喜男、

〔特〕 3名

(旧中27回) 佐原博、田中正紹、吉田忠至、

〔寄付〕

(旧中 24回) 松田長四郎 10,000円

(高 12回) 寺山和夫 4,000円

コトブキドライセンター

株式会社 寿

代表取締役 中村倉吉
(旧中第22回卒 五泉出身)

〒108 東京都港区高輪2-1-24
TEL 03(445)6501-2

永幸産業株式会社

代表取締役 伊藤勇五
(昭和23年旧中33回卒 鹿瀬町)

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-16-8
TEL (03)770-3291

母校, 本年度卒業生は274名

卒業式は 3 月 1 日

◎ 3 年生の進路状況

・就職内定率 92 %

	男	女	計
県内	22 / 25	72 / 82	94 / 107 (88 %)
県外	6 / 6	55 / 55	61 / 61 (100 %)
計	28 / 31	127 / 137	155 / 168 (92 %)

・進学希望者 (合格は 12 月から)

	男	女	計
大学	8	3	11
短大	4	13	17
専修 その他	39	39	78
計	51	55	106

就職内定率 92% / 昨年とくらべて 10% 上昇しています。まずまず、と喜ぶたいところですが、そう浮かれてもいられません。今年前半は良かった景気も、秋以降は暗雲がでてきています。すでに新潟市内の求人はいなくなる一方、東京の有名企業の倍率は上がるばかりです。先行きは厳しさが増していくことでしょう。

ごく当たり前のことなのですが、なかなかままならないのが生徒の実態のようです。とにかく、松高生はガンバリが足りない、意欲が足りないと言われていました。進学に関しても同様です。ぜひご家庭でも充分話し合われたうえで、早めに目標を定め、それにむけて大いにファイトを燃やして欲しいものだと思います。ガンバレ松高生

(62.12.P.T.A. 便りから)

----- ☆ ----- ☆ ----- ☆ -----

住所が変りました (新住所)

- | | | | |
|------------|-------------------|------------|----------------------------|
| ◎ 旧中 24 回卒 | 茂野宏一 | ◎ 高 23 回卒 | 笠井 勉 |
| 〒 364 | 埼玉県北本市東間 8 - 297 | 〒 271 | 松戸市胡録台 155 - B 32 |
| | 沼田ハイッ 105 | ◎ 高 8 回卒 | 佐藤 旬子 (塚野) |
| ◎ 高 3 回卒 | 大島エミ (平柳) | 〒 | 横浜市栄区野七里 1 - 2 - 26 - 2626 |
| 〒 251 | 神奈川県藤沢市鶴沼 | ◎ 旧女 19 回卒 | 神田マサ (金子) |
| | 松が岡 3 - 6 - 8 | 〒 270-13 | 千葉県印旛郡印西町木ノ下東 |
| ◎ 高 18 回卒 | 鈴木則子 | | 4 - 6 - 19 (63 年 3 月から) |
| 〒 170 | 豊島区上池袋 1 - 31 - 2 | | |
| | たか山荘 F 号 | | |

雑感(思い出)



中村倉吉

齢68才、皆様にも元気で輝かしい63年を迎えられた事を寿ぎ申し上げます。顧みれば、昨年3月で旧中を卒業して50年、以来今日迄様々な思い出が山積して居り一朝には語れませんが、昔も今も教育は大切である事を述べて皆様の一興に寄与出来ればと思います。

(1) 新入生としての寒稽古は誰でも経験があると思いますが、私は早朝4時半頃起き五泉一村松間の街道4キロを吹雪と闘いながらの登校。「頑張ろう」「嫌だなあー」と思いながら黙々と歩きました。道場では冷たい柔道衣を着て、先輩からは投げられ飛ばされ、泣くに泣けない一週間でしたが、歯を食いしばって苦しみ耐える事で健全な精神と身体が養成されたものと思っています。又校則と共に**公明正大、質実剛健、向上進取、勤儉力行、自治協同**の校訓実践五目は、今日の豊かな社会でも立派な伝統として通用するものと思います。

(2) 徴兵検査は甲種合格で家族の者に祝福され昭和15年新発田連隊に入営しましたが、支給された衣服で靴が小さく。古年兵に申し出たら“足は靴に合わせろ”と怒鳴られ我慢して訓練していたら、3日目から足が化膿し歩けなくなり、軍医の診断で漸く交換して貰った思い出があります。理由とか意見は通らない。全て言われた通りに実行する軍隊教育は耐えに耐える根性を養成するのが基本であり、自然に苦しみに耐える事が喜びになるような考え方に教育します。そして敵に殺

されるか殺すか善悪はともかく、負けられない一本勝負の戦闘生活に明け暮れて、中国大陸に7年間を過しました。戦死した戦友には誠に申し訳ありませんが、私は運が良く帰国する事が出来ました。

(3) 戦後は40余年、今度は経済戦争で零細企業を営んでおりますが、学校時代や軍隊で学んだ教育体験が、今日の人間形成につながっており、末だに転んだり起きたり、負けずに進んでおります。

人生の最終目標はいつも健康で生き甲斐を持って長生きする事と思いますが、**躰**は老いても心はいつも青春で、夢と希望を持ってお互い21世紀に向い前進しようではありませんか。今年は辰年でもあり佐伯支部長を中心として新人類も旧人類も協力して親睦の輪を広げるよう、事務局として各位の御健斗と御協力を祈念申上げる次第であります。

(筆者略歴)

大正8年生、五泉市出身、中学卒業後家業の呉服店手伝い、昭和15年現役入隊、甲種幹部候補生、中支、北支を転戦、終戦時陸軍大尉、中国政府より戦犯に指名されたが、一中国人の証言により無罪となり、21年6月復員、23年上京、35年不動産賃貸、ドライクリーニング等の事業を始め今日に至る。東京支部事務局長。

(旧中22回)



戦争の思い出



水尾 広吉

1 前言

私は昭和8年7月旧陸軍士官学校を卒業、会寧（北朝鮮東北部）という村松位の町にあった歩兵第75連隊付となり、10月歩兵少尉になった。昭和9年4月、下志津飛行学校（千葉市北部）で約2ヶ月偵察教育を受けた。この教育を受けたことによって、私の戦時職務は歩兵から航空部隊の偵察将校に変わった。偵察将校というのは空中から敵や味方の様子、道路や地形の状況を調べて、空中写真（註1）や通信筒（註2）で地上部隊に知らせるのが任務である。

私は11年7月20日東京で結婚、妻を連れて会寧に帰った。この時は中尉になっていた。12年7月7日芦溝橋事件発生、同月22日夕刻、「奉天（瀋陽）に至り、飛行第一大隊長の指揮を受けよ」という命令を受け、23日朝9時30分会寧発の汽車で長春を通過して奉天に向った。24日同地着、大隊長柴田大佐に申告し、第二中隊に配属された。

（註1） 空中写真、これには斜写真と垂直地域写真の2通りがある。前者は1,000 m以下の高度で局部目標例えば橋などを斜上方から撮る写真のことで各部隊の要求によって撮る。後者は2,000 m以上の高度から、広地域に亘る目標例えば敵の陣地線等を垂直に何十枚或は百枚以上も撮り、これを集成して一枚の写真とするものであって、主として高等司令部の要求で撮る。この場合、操縦者は撮影コースを等方向、等高度、等速度で飛び、偵察者は各撮影コースの進入点の確認を行い、風向・風速を測ってシャッター間隔を修正し、撮影点の真上を通過する時自動シャッターを入れる。撮影計画には精度を上げ、隙間が出来ないように、縦横共に2分の1の重なりをつける。

（註2） 通信筒、これは厚紙製の茶筒位の大きさの筒で、この中に命令文や敵味方の様子等のメモ、或は簡

単な図面を入れるものである。通信筒による空地連絡には、投下と吊り取りの2つがあり、投下の時は筒の頭に紅白の布の短冊をつけ、地上からの発見に役立てる。歩兵部隊では大隊毎に空地連絡班があって、紅白の大きい布数枚と竹竿、通信筒をもっており、紅白の布は位置標示と地上から飛行機に対する簡単な要求用に使用する。通信筒投下はこの標示を目掛けて投下するだけなので簡単であるが、吊り取りはなかなかむずかしい。吊り取りの時は兵隊6・7名が一組となり、竿持ち各2名、通信筒係2名を班長が指揮する。竿持ちは飛行機の進路の両側に、約10 mの間隔をおいて竿を立て、通信筒係りは両方の竿の先に麻縄を張り両端に通信筒を結ぶ。両方の竿を立てると、中間の麻縄の高さは3 m位に下がる。

操縦者はこの竿の中間を高度5 m位で通り抜ける。偵察者は身体を機体から乗り出し、鉄製の錨をつけた麻縄を下ろして、竿の間に張られた麻縄に引掛けて、たぐり寄せるのである。これは簡単なようであるが、操縦者も偵察者も大変神経を使う。特に山の中とか、敵に包囲されている部隊の通信筒吊り取りは危険を伴う。

この空地連絡法は現在の科学技術からみると洵に幼稚であるが、当時はまだ無線が普及していなかったので仕方がなかった。

2 保定北方地域写真撮影

大隊は8月9日午後天津飛行場に前進、同時に私は保定北方地域垂直写真撮影の命を受けた。当時蒋介石軍は地形上保定（天津西南方約150 軒）北方地域で真面目な抵抗をするだろうと判断されていた。またこの日第一中隊の1機が同一任務で出動したが、未帰還の儘であった。私は地図（5万分の1）を張り合わせて研究した結果、大冊河北岸地区から保定まで、正面中約30 軒、奥行約10 軒の地域を全河沿いに概ね西から東へ高度2,500 mで4

コース撮影する計画をたて、翌日試験飛行及び試験撮影を行いたい旨報告し、中隊長の承認を得た。下志津飛行学校で1回地域写真を撮った経験はあるが、その時の地域は正面巾約10軒、奥行2軒の2コースに過ぎず、操縦者もヴェテランだったが、今回の地域はその15倍、操縦者も偵察者も未熟だったので、果して旨くいくかどうか不安の念で一杯だった。

10日午後2時離陸（操縦者井上伍長）全50分現場着。第1コースに進入しようとしたが、操縦者は進入点が分からず三度やり直しを命じたが何れも失敗、遂に進入点が比較的明瞭な第3コースより進入することにしたが、ここでも3回目に漸く成功、このコースの撮影に入る。途中で風が強くなってきたので撮影を打ち切り帰還し、フィルムを現像に出した。11日に集成写真をみたところ、案外よく撮れていたの自信を持った。井上君と進入点の研究。

12日快晴、午後6時離陸、全50分現場着。直ちに第1コースに進入、1回で成功。風向、風速も修正の要なく、第1撮影点上空でシャッターを切り、その儘飛行を継続し、7時終末点通過反転す。後ほぼ同様にして他の3コースの撮影を終了し、9時10分着陸す。

13日、写真の集成を手伝う。コースに隙間なく成功を喜ぶ。14日集成写真を航空兵団司令部に提出し、讃辞を受く。

3 不時着

昭和13年3月28日、中隊の一部は山西省太原から河北省石家荘（保定西南方約120軒）に移駐を命ぜられ私も一緒に移動した。その任務は京漢線沿線部隊に協力するためであって、当時私の操縦者は樺田軍曹に変わっていた。4月5日正午私達は石家荘飛行場を離陸し、涞源（保定西方80軒）守備部隊に通信筒を落して帰途についた。間もなく樺田軍曹から、滑油温度が115度に上昇しているという連絡、次で焦げくさい油の臭があり、遂に滑油が流れ出しているのが見えた。眼下を見ると拒馬河の峡谷が切り立っている。この河に沿って飛行し、紫荆関（涞源東方約20軒）上空で、下に友軍がいることを知らせて、彼を元気付けた。又私は無線で基地宛「シケイカン、カツユモレ」と打電したが、気流が悪く旨く打てなかった。間もなく彼から落ちついた声で「左前の河原の方へ行き

ます」と連絡があった。左前をみると成程河の曲り角が白い河原になっている。私が「それでよい」と答えると彼はすぐ左に旋回した。幸いエンジンはまだ低音で回っている。切り立った尾根をすれすれに滑空してから上流に向って更に左旋回し、着陸コースに入った。前方をみたら、一抱えも二抱えもある大石がごろごろしている。私は「頼むぞ」と一声かけて、学校で教わった不時着の心得を思い出し、落下傘を左肩にあてがった。ドスンと2・3度鈍い音と衝撃があった後、その儘の姿勢で止った。すぐ立ち上って、「大丈夫か」と彼に声をかけた。彼も立ち上って「大丈夫です」と答えた。飛行機を見ると、浅瀬に突込んでいて、エンジンは半ば脱落し、両脚はふっとんでいた。「よく怪我しなかったナァ」といって喜びあい、かつ彼に感謝した。時に1時5分、場所は紫荆関東北方約6軒拒馬河屈曲点の河原であった。

昂奮が収まり真先に頭に浮んだのは、どうやって紫荆関に辿りつくかということだった。というのは日本軍の占領は点と線だけであって、一步外は敵地だったからである。ふとみると河には粗末ではあるが二本丸太を連ねた木橋が架けられており、そのさきには部落があった。そのうちに部落から人影が見えて、こちらへ来るように思われた。その人数もだんだん増えて7・8人になり、皆両手を挙げて走ってくる。近づくに従い、皆カーキ色の服をつけているのが分かった。「日本兵だ」と思わず叫んだ。彼等は紫荆関守備隊の斥候部隊であって、たまたまこの部落を偵察中であつたのだつた。「これで助かった」と張りつめた気分が一度にほぐれ、腰を下ろして一息入れた。私は彼等の協力で石家荘宛機体の処置につ



昭和13.4.5. 河北省紫荆関
（保定西方70軒）東北方6軒拒馬河
屈曲点河原にて（左端、筆者）

いて指示されたとき旨打電し、また機関銃をはじめ、部品を取り外した。しかし、夕刻になっても指示がなかったので、止むを得ず機体を焼却して紫荊関に行き一泊した。6日更に途中で1泊、7日夕刻石家荘に帰った。

4 後書き

1. この記事は私の日記を基礎にして纏めたものである。
2. 飛行第一大隊の飛行機は一葉半の94式偵察機で、最高速度は時速180軒。
3. 中隊長は遠藤大尉で、中隊付には陸士同期生の山田壮一中尉がおり、心強かった。

4. 不時着した飛行機は、沫源で通信筒を投下した際、敵弾がエンジンに命中したと思われる。

(昭63・1・14記)

陸軍大学第54期卒、終戦時陸軍中佐
昭和26年から39年まで陸上自衛隊勤務
現在自適

(旧中23回)

建設機材総合商社

関東資材株式会社

代表取締役 佐久間 英 輔
(高校第6回卒五泉出身)
小山地区新潟県人会会長

本 社 〒323 栃木県小山市駅南町6-22-3
TEL 0285-27-1931(代)
宇都宮 宇都宮市江曾島1-9-3
営業所 TEL 0286-58-6181(代)

各社アイスクリーム
冷凍食品・清涼飲料卸

有限会社 越後食品

代表取締役 石 黒 四 郎
(高9回卒)

会 社 東京都世田谷区岡本1-28-20
TEL 417-5110(代)
自 宅 東京都狛江市岩戸南2-14-14
TEL 488-2117

訃 報



支部幹事の吉田松二郎氏(旧中23回卒)は日赤、広尾病院にて肝臓ガンのため昭和63年1月30日逝去されました。謹んで哀悼の意を表しご冥福を祈ります。

奮いて立つべし村松高等学校

伊藤 淳一

今からちょうど9年ほど前のこと、村松高校の五泉地区PTAの集まりに参加する機会があった。その時たまたま五泉中学の3年の学年主任で、進学指導をしている村松中学時代の旧友と顔を合わせた。昔からあまり口のよい男ではなかったが、「おまえんところも、できわるいな」と、にやりとされた。彼の娘も私の娘同様母校にお世話になっているということであった。当時すでに村松では、できのよい子は新津高校へという傾向は定着していたが、五泉、村松という序列にはなっていなかったと思う。

この4月の終わり頃、お母さんのおなかの中にいた時からのおつきあいの娘さんが診察にやってきた。今年の春めでたく村松高校に進学したと聞いていた娘さんである。いつもの明るさを失い元気がない。近頃食欲もおち、学校へ行きたくないし、よく眠れないとのことであった。母親の話によれば本人の希望では五泉高校へ行きたかったが、女の子だから近い高校でいいだろう、ということ村松高校に進むことになったのが原因だろうということであった。幸い、彼女の心身症も割に短い間の治療でなおり、もとの快活な娘さんに戻ってくれた。町のうわさでは、いまや村松町の二つの中学とも新津、五泉、村松高校という序列で進学指導が行われているということである。普通高校は大学進学率で序列化されてしまう。大きな都市にある多くの高校はいかに細かくランクづけされようとも、住民そのものの生活とはあまり関係がないであろう。しかし村松のような小さい町では、唯一の普通高校が最も低く序列化されることは、町自体に大きなけりやインパクトとを与えないではおかない。

昭和23年には、新潟県に13の県立中学があった。40年を経た今日も、わが村松を除いたすべての学校は、それぞれの地区の進学校として輝かしい伝統を守り、それぞれの地区の中心校として高い信頼を集めている。村松高校凋落の原因は第1は地理的条件である。旧村松中学時代には、中・東蒲原には村松町しか中学がなかったの

で、この広い地区から俊秀が集まった。新津、五泉、津川に普通高校ができたので、わざわざ交通不便な村松まで、町の外から優秀な生徒がやってくるメリットがなくなった。

第2には、村松高校自体の無為、無策である。一部教員による思想教育が激しくて批判を浴びたにもかかわらず、迅速な対応をとれなかった。進学志望者の父兄からだされた積極的進学指導の要望に県立高校であるがゆえの限界を理由にしてこたえることがなかった。

第3には、われわれ村松町在住の同窓生の怠慢である。松高の凋落をまのあたりにしながら、批判者的態度をとり、組織的支援を与えることがなかったことである。

しかし、村松高校もようやく、ここ何年かの管理者の懸命の努力で、大幅な教職員の入れ替えが行われ、松高の凋落のきっかけを作ったといわれる教職員組合も、昨年から松高の信頼回復をめざして現況報告と積極的取り組みの姿勢を、町民に向け広報するようになった。

あと4年で村松高校も創立80周年記念を迎える。1万何千かにおよぶ卒業生は、日本全国に散り各分野で華々しい活躍をしている。ことに大学から、幼児教育にいたるまでの教育界に入った同窓の層の厚さは、教育の町村松の名を辱めないものがある。

この教育の町といわれる村松町が、伝統と名門の村松高校を、このまま捨ておくことは許されないし、また、許されるべきではないだろう。

いま、私の胸に、臥龍原頭幾星霜、誉れは高き松城の、月の桂をなゆずりそ。栄ある名をぞとこしえに、という応援歌の一節、一節が断片的に浮かんでは、消えてゆく。

○————○————○————○————○

拝復お手紙ありがとうございました。

佐伯先輩の東京支部長としての精力的な御活躍振りを、同窓会総会で拝見したり、支部会報で拝読させていただいたりして、ただただ感服しております。

それに引き換え地元にいる同窓の私達の、無気力と、

無為に内心じくじたる思いでいっぱいしております。

お申しこしのこと大変に光栄に存じます，何分宜しく
お願いもうしあげます。

略歴とのこと，面映ゆいことですが，簡単に記します。

村松中学33回で，新潟高校を経て，最後の新潟医科大学を昭和29年に卒業しております。昭和43年より村松町
本町2の現住所で産婦人科を開業しております。

娘が二人とも村松高校に御世話になりましたので，昭
和54年から59年までPTAに関係させて頂きました。

東京支部の会報に触発されて，暮の臨時理事会で会報
の発行が決められましたので，いずれ具体的な動きがあ
り，会報がお届けできるようになるのではないかと存じ
ています。

加齢していきますと，育みそだててくれたものへの思
慕がつのるのでしょうか，母校への思いしきりの気持ち
がします。山本一興先生，松尾吉信先生にはいつも御指
導頂いております。ここまで来た村松高校に栄光の日の
訪れることは至難のこととぞんじますが，できることから
同窓手をとりあっていかなければと存じています。

東京支部の益々の御活躍を祈って止みません。

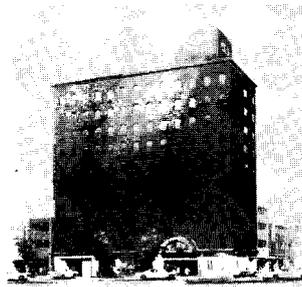
昭和63年1月6日

伊藤 淳一
Tel. 0250-58-7101

「注」 本文は村松万葉1987年版に掲載された論文で
ありますが，特に御本人の承諾を得て転載したも
のであります。



ビジネスに 2つのヴィラ

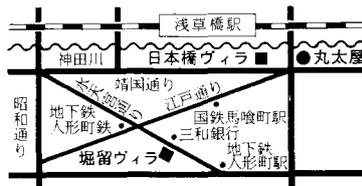


● 東京
● 日本橋ヴィラ
東京都中央区日本橋馬喰町二丁目
電話 (〇三) 六六八一〇八四〇



● 丸太屋
● 堀留ヴィラ
東京都中央区日本橋堀留
電話 (〇三) 六六四一〇八四〇
一〇一〇一〇

● シングル 6,500円より (税・サービス料込)



BUSINESS HOTEL **ヴィラ**

丸太屋株式会社

代表取締役副社長 塚田 勝

(高8回卒)

〒103 東京都中央区東日本橋2-26-8
電話 03-862-0681

自宅 浦和市原山4-23-12

なつかしい半世紀前の

"力作" ふたたび

旧中第24回卒（昭和14年）の皆さん若かりし頃の作文集が国漢の担当であった故齊藤勝先生のご子息から送られてきた。

丁度今から52年前、昭和11年秋頃のもので3年甲組の皆さんの作文です。全部で42名、相当苦しみながら書かれた様子がうかがえる。支部在籍の会員の中から代表的なものを三編選ばせてもらい、ご本人の快諾を得、併せて返書も載せた。

このお便りの中に万感がこもっており今更説明もいらないと思う。戦死された方、物故された方の作文もあり当時を思い起すには絶好の資料であろう。御希望の方にはコピーして差上げたいので支部まで申し込んでいただきたい。ご子息の齊藤朝之氏に深謝。（佐伯）

作 業（評価 良上）

第三学年甲組 33 番、茂野宏一

上衣をぬいで皆は集った。朝とは言ひながら日はだいぶ高い。先生の指揮のもとで各班は班長に引卒されて指定の場所につく。

ホウキ、もって、草刈鎌等を持ってくるもの、草をとるもの皆一生懸命で仕事に余念がない。暫くすると豚舎の方で“わあー”と言う声が聞える。こんどは豚の苦しさに鳴く声がする。きっと豚舎掃除の班から起ったものだろう。自分の班は兎舎の掃除だ、兎の箱が持ち出された。此れからが一難だ、自分も兎をつかもうとして長い耳をつかんだが後足でもがくので落した。すると傍に居った〇〇君がなれた手つきで兎を摘んだ、兎は赤子が母に抱かれた様にじっとして可憐らしい真赤な目であたりを不思議さうに見廻す。箱の中の糞を取り出して新鮮な糞と取替てやる。一方兎はクロバーの中で楽しそうに走り廻ると思うと、ぴたっと立上って小さな鼻でくんと臭をかぐ、又、箱の掃除は出来た。餌をかりにいった△君と□君はいきいきとしたクロバーを籠にきて、そして新しい糞に“よう、出来たな”と言ひながら入れてやると、兎は鼻をくんとさして甘さうに食べ始める。皆は一生懸命に後の糞くずのちらかったのを掃

く。それを〇〇君は手で摘んでもこの中に入れると、もつま持は元気よく走って行った。どの班も皆終ったらしい。班長の元気のよい号令があたりの空気を振して自分の耳に入って来た。

（お便り）

拝復、失礼いたします。仲々珍しいもの御入手なされ懐しく拝見いたしました。

記憶があるようで又無い様ですが昔の腕白時代のこと。是非共同級生各位の作文集、御手数でも御送附賜れば幸甚と存じます。

会報掲載の件、光栄に存じます。退職して埼玉に引込みましたが、支部大会、赤山会には出来る丈出席したいと存じますのでよろしく願います。1月17日 敬具

作 業（評価 良上）

第三学年甲組 38 番 寺田徳和

昼食後「草取り始め」の組長の号令で一同さっと散る。残暑の太陽が照りつける。皆上衣を取り作業姿だ。腰をかがめて一生懸命黙々として働く。草切る音だけ聞える。皆の顔には汗が玉をなして光って居る。尊い汗、皆健康な体、立派なうで、真黒な顔、健康、平和、草を取り学校を清くして思う存分勉強するのだ。又スポーツの秋、

運動の秋、よく切れる鎌だ、この鎌で出来るだけ、いや全部の草を退治するのだ、切り取った草の根本には白い液が幾つかの玉をなす。作業をして心を鍛錬するのだ。黙々として自ら進んでやるといふ心を養ふ為の作業だ。作業は大好き。作業の嫌なものがあるか。蝶が飛ぶ。草を取る。平和。こんなことで弱ってはならぬ。広く世間を見ないからだ、終日畠を耕すお百姓さん、御国の為働く兵隊さん。これを考えると自然に頭が下る。勇気が出る。我等も中学生徒、進んで仕事を見つけようではないか。

(お便り)

前略 お手紙有難うございました。同窓会の運営本当にご苦勞様です。いつもお世話になります。今後ともよろしくお願い致します。少し風邪気味でご返事が遅くなりました事をご容赦下さい。作文をお送りいただき大変なつかしく思いました。出来ることならもう一度中学時代に戻りたいものです。

齊藤勝先生には中学時代の保証人になって頂きましたし一年の時の主任でした。ご子息が居られた事は記憶しております。私が五年生の時に一年生だったと思います。先生には大変お世話になりました。

昔のことはすべてなつかしいものです。わざわざ作文集をあなた様に送って下さったご子息のご厚意を感謝しております。私の作文を会報にのせることについては異議はございません。但し今の中学生に比較すると幼稚のように感じてお恥かしい次第です。

正門を入った玄関の前で先生方と卒業生、全員で撮った卒業写真は手もとにご致します。

今後ともよろしくお願い致します。草々

作 業 (評価 良上)

第三学年甲組 42 番 松田長四郎

その日は忘れたがこの前の前の作業の日だった。二時間目の天高く馬肥えるの秋日を全身に浴びつゝ黙々として一時間を有益にいそしんだ作業であった。二限目の集合のサイレンが元気よく鳴った。各自は上衣を脱いで、ズボンの端をかがいしくまくり上げ各班別に集合するや、“第三班は豚舎掃除のやうだぜ”とあちこちでさゝやく者、そのたび毎に興る“わあ”という歓声、つづいて笑声、

やがて班長の号令で正しく整列、僕は第三班だった。笠原先生に敬礼をし各班の作業課目及びその要領価値を示された。第一班は“向ふの除草”第二班は“□□□”“第三班豚舎の掃除、これはとくに良くやること”。又しても興る歓声、三班の者も初めは各々口には出さない者もあるが不平は山々であった。それでも皆がこんな事も世の中へ出る上に、又修養上大切であることを感ずるや忽ち豚を捕へてブラシをかけてやる者、臭気烈しき糞を堆肥舎へ運ぶ者、きれいな糞をしいてやる者、ただ黙々として勤勞の味を味ひつつ汗を流してやること二、三十分。終つて又集合、先生の顔には喜びがあふれる。とくに第三班は大層賞められた。この一時間が如何に修養上大切であるかが良く知れた。

(お便り)

前略 御書状有難く拝見しました。珍しい記録をいただき往時茫々懐しきで一杯です。今報に掲載していただければ光榮に存じますが、何か老人の懐古趣味の気もしますが御一任します。同窓会の方はお蔭様で年々盛んになっており御同慶の至りで、何も出来ませんが蔭ながら御後援と思っております。御返事のみ。



阿賀野川ラインの景勝地

62年9月改築落成

きりん山温泉

ホテル 福 泉

磐越西線・津川駅・鹿瀬駅。下車バス10分

電話 02549-2-3131

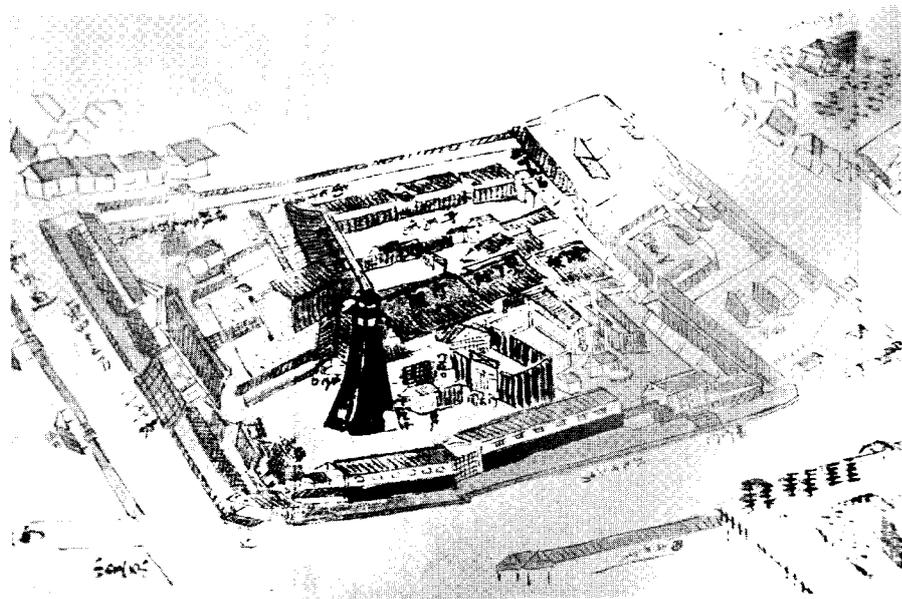
(東蒲原郡鹿瀬町鹿瀬)

秘蔵写真をお貸し下さい。

皆さんのお手許にある、郷土関係及び学校関係又は思い出のある写真などがありましたら、是非本紙で紹介したいと思っておりますのでお貸し下さい（事務局）



第6代、校長 鈴木諒先生の御家族（大正14.4.11～昭和7.3.31、在任7年）
昭和7年4月1日村松中学校から千葉県立大多喜中学校長へのご栄転に際し村松町の校長官舎において撮影したもの、ご長男は大正14年生れてすから今は63才の
はずです。（齊藤朝之氏蔵）



前号（第2号）でご紹介した、神田須田町付近にあった堀丹後守の上屋敷の絵図。
この前に丹前ぶろがあった。（堀直昭氏蔵）

戊辰の役と堀家の改姓

佐藤 久

慶応4年1月3日(1868)鳥羽・伏見の戦いに大勝を収めた薩長連合(以下西軍とする)に対し幕藩の形勢は日に日に険悪となり、肝心な幕府の動向は全く予断の許されぬ所となってきた。そんな緊迫した情勢下において村松藩に対し会津・桑名の両藩からの重圧がかかり始め、一刻も早く藩の去就を決定すべき必要に迫られ急速前藩主堀直休「ナオヤス」未亡人仙寿院の呼びかけで2月4日堀直儔「ナトシ」邸に近藤幸左衛門・田中勘解由・奥田愛之進・関伝・淵采男・野口彦兵衛・加藤平三郎・奥田采女等を集め慎重協議の結果「朝命に従うこと」に決した。しかし会津藩の探索愈々厳しきが故に、藩意の表明は時宜を見はからって行う様申し合わせ、当初は藩境警備という名目で兵員を配置した。その間にも戦雲はひしひしと北越の山野をも覆い始めてきた。

5月2日、小千谷の慈眼寺で行われた西軍の“東山道軍監”岩村精一郎と長岡藩・河井継之助との会談の席上で河井は「目下越後に進駐している会津・桑名両藩との調停に時間を要し、今直ちに朝命に応じることは難しいが必ずや会桑両藩を説得して平和的解決の方向に藩論を統一したい意向故に、進軍を暫くの間お控え頂きたい」と訴えたが岩村の前に容赦なく一蹴されて会談はあえなくも決裂し西軍の長岡城攻撃が開始された。

この隣藩・長岡の動向をつぶさに見守りつつあった村松藩は、5月10日大会議を開き、始めは先の協議結論の通り官軍に加担すべしとの論が多かったが、用人・田中勘解由等強硬派は一転して「社稷を守る為此の際奥羽列藩同盟側に就くべし」との説に押しきられ遂に長岡出兵を決議した。

しかるに長岡は西軍猛攻撃の前に5月19日落城、22日に退いてきた同盟側は、加茂の会議所において軍議を開

いたがこの席には藩から森重内・田中勘解由・近藤貢・稲毛源之右衛門等が出席した。この時河井継之助は「村松藩には戦意が認められず、長岡防衛戦の際には殆ど尽力しなかった」と真向から非難を浴びせた。この難詰に耐え兼ねた田中勘解由はその場でいきなり自刃を企てたほどであった。後に近藤貢は黒水「クルミズ」において自刃し相果てた。これより後は小藩の宿命か否応なしに同盟軍と命運を共にせざるを得なかった。

5月24日には若殿様・堀徳次郎直帳「ナオハル」は遊学の名目で、矢部万平らに守られ米沢に旅立ったがこれはまさに同盟軍に対する態のよい人質であった。一方仙寿院・奥田貞次郎・お途・お浪の婦女子は、滝谷滋光寺に難を避けることとし、藩の主力は森隊・堀(小)隊・速水隊・工藤隊・片岡隊・松尾隊・山村隊等に編成され見附方向の前線に出動していった。しかし米沢藩の記録に拠れば、“彼等はあまり勇敢ではなかった”様である。したがって同盟側として重きをなさず、所謂「員数」に加わるだけという極めて不名誉な評価を受けていた。

藩主・堀直賀「ナホヨシ」は前藩主・堀直休「ナオヤス」の遺子一直張の成人に達する10年間の仮殿様であり只管いかにして自藩の社を守り続けて藩主の座を直張に無事引き渡すかという使命があった。重臣たちも亦同様の考えをもって極めて慎重な行動に終始せざるを得なかったが故に、この合戦で真に戦闘らしきものは僅かに6月1日一赤坂(下田村)の戦だけであった。それも堀溝へ移動途中うかつにも進路を誤り敵正面に迷い出た藩兵が、松代(長野県)藩鉄砲隊に好餌ござんなれと狙い撃ちされて、奥畑伝兵衛・青木剛八・金子喜兵衛等が討死したという誠に痛ましいものであった。その後、村松藩は殆ど後方の警備にまわされていた。

7月末、海路を迂回した西軍の一隊は新発田藩の手引

きを得て松ヶ崎（新潟市）付近に上陸を果たした。いきおい長岡正面戦線の同盟軍は凶らずも腹背に敵を受ける態となって俄かに崩れ、やむなく8月1日の未明遂に全軍に撤退命令が伝達された。村松藩も直ちに先各隊に連絡、それぞれ本隊に帰着するを待ち急ぎ評定が開かれて「藩主直賀以下一米沢行」を決定したのは午後2時頃であった。これは村松の無血開城である。当然城下は大混乱となったが、婦女子に対しては「立ち退き勝手たるべし」とつげられたのみであった。

城の明け渡しの為、松井弘・小川宮太・清水作蔵の3名を残留せしめた。直賀の一行は川内谷より谷沢・津川・小荒井を経て8月14日全員米沢に入り青蓮寺を本陣と定め東源寺・禅透院等夫々市中に分宿した。

一方慈光寺に難を避けていた恭順派の仙寿院・堀貞次郎は8月5日、五泉に居を移し、同15日、丸屋（吉田久平）方に宿泊せし折、西園寺公達より呼び出しを受け「本領安堵」の旨を達せられて翌16日帰城し南御殿に入られた。米沢に退いた藩主力は9月4日米沢藩が西軍に降伏せる結果、18日直賀は当地に進駐した板垣退助に降伏、嘆願書を差出しその監視下に10月21日全員再び村松に帰り清水寺・正福寺等に収容された。

この間、矢部万平・稲毛源之右衛門・前田又八・坪井静作等の軍事方は自刃し果てたものである。

12月7日、直賀は陰居し、貞治郎が藩主となった。堀直弘である。この月、藩老・堀直備と片岡九左衛門は東京に護送されていったが、翌2年5月に再び村松に差し戻され、24日、堀直備と軍事方下役の齋藤久七の二人は斬首に処された。

この直備の家系は、村松では玄蕃様と称され今日でも多くの人に慕われている。その始祖は堀直政の第四子民部少輔・直里、即ち堀直奇の弟である。その子玄蕃直常（喜平太）は堀直時付きとなって二千石を給され、以来村松藩の一の家老として歴代藩主を補佐してきた家柄である。その略系を次に示す。

堀直里① 直常② 直香③ 直高④ 直供⑤
直増⑥ 直義⑦ 直興⑧ 直旧⑨ 直寛⑩
直 ⑪ 直容⑫ 直孝⑬ 直道⑭ 直昭⑮

※ 直昭⑮・東京都杉並区在住・支部幹部

奥田姓に復帰した経緯は、維新後、隠居した堀直賀の提案で堀直弘（村松）堀直明（須坂）堀之美（椎谷）を呼び四者協議の上「今般、類別宗族取り調べにあたり、祖先の姓氏に基き改称したき段――（以下略）――」と願い出ることと決し、その結果明治10年2月に「奥田」復姓が認可された。

この稿を結ぶに際して、先頃病身をおして遠路を厭わず墳墓の地・村松を訪れられた堀直道氏（直昭氏の祖父）の感懐の詩を紹介させて頂きたい。

白山連嶺聳雲雄 城水潺潺郊野中
父祖置藩年四百 佇将城址感無窮
村松城址 懐古 直道

戊辰戦局百籌非 哀惜処刑竟不帰
一命捐囿全社稷 墓前肅々涙沾衣
悼曾祖父・右衛門三郎直寿 直道

筆者紹介

筆者の佐藤久氏は現在村松町城町に居住されており郷土史の研究家として著名である。現在、村松町史編纂委員、村松文化財審議委員長、村松町史料調査会代表を務めており、又松城会幹事でもある。

今回、本会報に掲載するに当り堀家末裔である堀直昭氏（高8回卒支部幹事）を煩らわして執筆を依頼したもので全五編から成る。

詳しく知りたい方は直接、電話するなり、又書状を以って問合せしてみるのも良いと思う。（但し御本人が迷惑でなければ）

電 0250-58-6063

当支部として筆者の佐藤氏に甚深なる感謝と敬意を表する次第である。



予 告

本年度の支部大会は
63年6月11日(土) 午後3時から
ホテル高輪で開催します。

お誘い合せの上多数のご出席をお願いします。

本部先生にお願い

昭和50年頃からの卒業生の消息があまり分かりません。住所等御存知でしたら是非お知らせ下さい。
又、本年度卒業生で就職、進学のため上京される方のために、東京支部の存在を伝えて頂ければ幸いです。

編集後記

おそくなりましたが、第3号をおとどけいたします。ご協力を頂きました方々に厚くお礼申し上げます。
旧女、高校卒業生の寄稿があまり無いようです。次号からはどしどしお寄せ下さい。

昭和63年3月 第3号

編集・発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部

佐 伯 益 一

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24 榊 寿 内

TEL 03-445-6501

郵便振替 (東京2-136445)